

目次

序章 柳田国男と海外の日本語コレクション 1

贈呈された『石神問答』 2

海外の日本語コレクション 7

第一章 日本研究の歴史 13

日本研究とは？ 14

国学↓日本学↓日本研究 15

日本語と国学 18

シーボルト 23

初期ドイツ派と英国派 24

英国派は日本語を習得 27

ケンブリッジ大学図書館 29

第二章 ハイブリット・シーボルト・コレクション 33

ハイブリット・シーボルトと日本研究 34

アストン・サトウ・シーボルト・コレクション 41

旧蔵者別の内訳と蔵書印 44

シーボルト・コレクションの分類 49

第三章 なぜ複本が多いのか 57

アストン・サトウ・シーボルト・コレクションには複本が多い 58

神道・国学関係の複本 60

複本が多い理由 65

チェンバレンにも送付 67

神道・国学研究 71

書籍による協力・書籍の移動 74

サトウの収集 77

サトウの蔵書の行方 81

第四章 サトウの神道・国学研究 85

神道・国学関係 86

気吹舎と宮本小一 93

林麿臣 96

和田重雄 99

白石真道 104

鈴木真年と堀秀成 109

第五章 サトウの方法 119

蔵書の書込と『読史余論』 120

『入学問答』 129

『古道大意』、『玉樽』、『末賀能比連』 136

第六章 サトウの「日本文学史」 147

『アメリカ百科事典』と『群書一覽』 148

サトウの論文に掲載された和書 152

第七章

アストンの日本研究 181

文法研究 182

「秀吉の朝鮮侵略」 187

日本研究と種本 193

「日本上古史」 197

『日本紀』の英訳 203

『書紀集解』と『日本紀』刊行後の展開 206

第八章

アストンの『日本文学史』 215

エドマンド・ゴッスの依頼 216

アストンの『日本文学史』の序文と参考文献 220

三上参次、高津鎌三郎共著『日本文学史』 228

文学史における国学の影響 233

アストンのこだわりとキリスト教 236

第九章

アストンの『神道』 243

アストンの神道研究と日本人の信仰と慣習 244

サヘノカミ、『扶桑略記』、『古史伝』 253

生殖器崇拜 258

人類学者の著作と神話についてのアストンの意見 264

新しい世代の日本人研究者と英国三大日本学者 268

終章

チェンバレン、琉球、『群書類従』、新国学 275

チェンバレンの業績を回顧する村岡典嗣 276

チェンバレンの琉球研究 283

チェンバレンの蔵書、埴忠韶、『群書類従』 285

新国学 295

「国学」↓日本学↓日本研究」という発展の流れと英国三大日本学者 299

ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み——国学から日本学へ

Sample

参考文献	305
付記 ケンブリッジ大学図書館のこと	310
あとがき	317
索引 (1)	

Sample

序章
柳田国男と海外の日本語コレクション

ample

贈呈された『石神問答』

ケンブリッジ大学図書館は初版の『石神問答』^{いしがみちんどう}を所蔵している。著者柳田国男がウィリアム・ジョージ・アストン（一八四一—一九二二）に送付した献呈本で、標題紙に「アストン先生ニ奉る柳田国男」と記載されている。柳田国男は日本民俗学の父であり、一九一〇（明治四三）年五月に出版された『石神問答』は、前年に上梓された『後狩詞記』^{のちのかりしほのき}や同年六月に刊行された『遠野物語』と共に、日本民俗学の出発点になった著作である。アストンは近代を代表する外国人日本研究者のひとりであった。アストンおよびアーネスト・メイソン・サトウ（一八四三—一九二九）とバジル・ホール・チェンバレン（一八五〇—一九三五）の三人は、いずれも明治時代に活躍した英国人の日本研究者であり、近代的な日本学の開拓者であった。この三人は英国三大日本学者と呼ばれる。アストンの旧蔵書はサトウの旧蔵書などと一緒に、一九一一（明治四四）年にケンブリッジ大学図書館に収蔵されたので、柳田の『石神問答』も同館の所蔵本のひとつとなった。

アストンは幕末の一八六四（元治二）年に来日し、明治時代の前半期、英国の外交官（領事官）および日本研究者として活躍した。一八八八（明治二二）年に長年住み慣れた日本を後にし、再び来朝することはなかった。英国外務省を退職したアストンは、帰国後年金生活に入り、英国のいなかで日本研究を継続・発展させた。一九一一（明治四四）年に享年七〇歳で死去した。日本から送付された『石神問答』は、船便で一九一〇（明治四三）年の夏、遅くとも秋までには英国に到着して

いたと思われる。存命中のアストンは、柳田からの献本をその頃に受け取ったのであろう。ケンブリッジ大学図書館が収蔵したサトウからの譲渡本を含むアストンの旧蔵書には、アストン自筆の付箋（紙片）が付けられていた。アストンは『石神問答』の紙片に英文で「石の神々について」という注を書き入れていた。^①彼は柳田の書籍を熟読はしなかったかもしれないが、目を通していたことは確かであった。

ではなぜ、柳田国男はわざわざ英国に住んでいたアストンに自著『石神問答』を贈呈したのであろうか。柳田が自ら書いた『石神問答』の広告文によると、同書を刊行した理由は「西洋の学者に

手を下されると悔しいから

ちよいと先鞭を著けて置く

とのこと^②であった。また、

同書の中にも「もしや西洋

の学者にでも手を著けられ

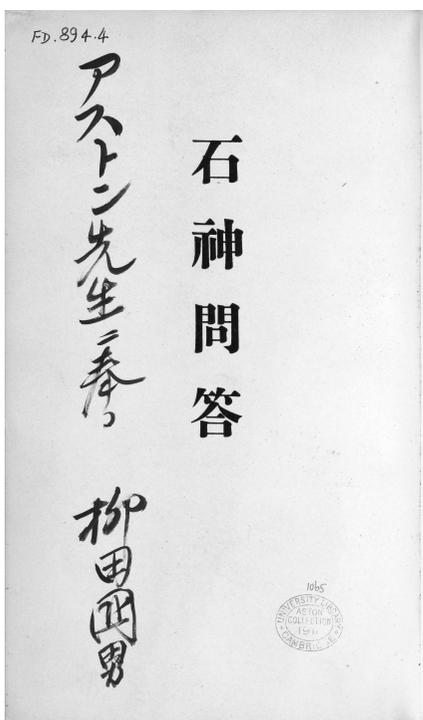
候ては残念と存じ候^③とい

う柳田の記述がある。当時、

柳田は『石神問答』で扱っ

たようなことが、日本人の

研究者よりも先に西洋の学



『石神問答』（柳田国男の書込）



ウィリアム・ジョージ・アストン（『日本神道論』（アストンの『神道』の日本語訳）より）

者に着手されるかもしれないというかすかな憂慮を抱いていたと考えられる。そこで、まず自分でその分野の著述を刊行し、それをアストンに送り付けたのである。柳田が『石神問答』が扱うような主題をめぐって競争相手と見なしていた西洋の学者はアストンのことであつた。少なくとも

もその中のひとは確実にアストンであつた。

なお、『石神問答』の献辞では、すでにこの世を去つた柳田国男の実父松岡約齋について次のような旧懐の言葉と共に、同書が実父に献呈されている。「敬虔なる貧しい神道学者」であつた松岡約齋は、平生から『石神問答』が扱うような題目に興味を持っていたという。

〔松岡約齋翁〕今若し世に在りて此書の成るを見たまはゞ必ず欣然として巻を翻へし且ほ々々みて我を見たまふならん^⑤

柳田にとつては『石神問答』は英国の日本研究者であつたアストン同様、「貧しい神道学者」であつた父親にも読んでもらいたかつた書物であつた。柳田も実父が喜ぶ様子を見たかつたのである。

アストンは英文による『神道』を一九〇五（明治三八）年に刊行した。それは日本学者としてのアストンの最後の大きな業績であつた。彼は原著『神道』の「第八章 多神論——人間神」で、「人間的性質を抽象してこしらへた神」として、「賽の神」（サヘノカミ）を取り上げるのである。アストンは『神道』の中で、賽の神は「男柱（男根）の神である」と主張する。彼は『扶桑略記』に記載されている九三八（天慶元）年の記事、『東遊記』（橋南谿著）の一七九五（寛政七）年の記述および『古語拾遺』の一節などを引用し、賽の神と男根（性器）崇拜を結び付けたのである。アストンは自分自身でも道祖神の図を所持しており、『神道』の注の部分ではその図に言及し、男根形の自然石で出来ている道祖神は辻に建てられていると説明する。サヘノカミ（賽の神、塞の神、道祖神、岐神、石神、道響の神など）に含まれる複合した要素の中で、性神としての側面を強調するアストンなどの外国人研究者に対して、柳田は『石神問答』を刊行することにより、その土俗神の本来の姿である境界の神、悪霊や疫病などの侵入を防ぐ神（防塞の神）などの要素を強調したのである。さらにそれに付け加えて、サヘノカミ（道祖神）などは宿神などの「古層の神」（精霊）^⑧と関係があることも暗示した。『石神問答』を贈呈した柳田としては、原著に対するアストンの反応を知りたかつたところであろう。しかし、彼は最晩年のアストンからは手紙などを一切受け取らなかつたと思われる。その当時のアストンには、新しい学問（民俗学）の黎明を告げる『石神問答』を咀嚼する時

間的な余裕は残されていないなかったのである。

ところで、柳田国男の『石神問答』を『三田学会雑誌』の「新著紹介」の欄で取り上げた歴史学者田中萃一郎（慶応義塾大学）は、アストンの著書と柳田の新著との関係を次のように紹介していた。

なほ著者〔柳田国男〕は西洋の学者の石神の問題に手を著けぬうち先づ研究の一端を公にすることであるが、塞の神即ち道祖に関してアストンの「神道」（一九〇五年出版）の一八六頁乃至一九八頁に詳細の論究見え、又シカゴのドクトルバックレーは一八九五年に Phallicism in Japan と題する単行本をさへ公にして居る、仮令研究の主題は稍や異なるにせよ、何れも本書の読者の併せて一読す可きものと思ふ。⁽⁹⁾

やはり、田中萃一郎は石神（道祖神）と性神が深い関係を持っている点に注目していた。また、彼はアストンの『神道』も読了していたのである。田中の紹介記事にあったバックレーの英文の著書（Phallicism in Japan「日本に於ける生殖器崇拜」）については後述する。

柳田は『石神問答』に引き続き、同書刊行の翌月に当たる一九一〇（明治四三）年六月に『遠野物語』を出版した。その『遠野物語』にも「此書を外国に在る人々に呈す」という献辞が含まれていた。外国にある人々というのは、素直に解釈すれば、海外の日本人と日本語が読める外国人（海外の日本研究者）の両方を含むのであろう。当時の柳田国男はアストンやチェンバレンのような海外

の日本学者を近著の読者の一部に想定していたのであろうか。日本民俗学の祖といわれる柳田は、なぜそこまで外国の日本研究者を意識したのであろうか。それについては、もしかすると外国人による日本研究が到達した段階、およびそこに至るまでの歴史が関係するかもしれない。はたして、その当時柳田国男が先を越されるかもしれないと感じるほど、西洋人の日本研究は進歩していたのであろうか。もしそうだとすれば、それはどのようにして進歩したのであろうか。

さらにいえば、柳田国男とアストンとの問題からもわかるように、外国人による近代の日本研究は、それだけで孤立していたのではなく、実は近代における日本の学問のあり方にも影響を与えていたのである。日本研究の歴史は日本の近代における学術・研究の歴史と密接に関係していたのである。近代の日本学は日本の近代的な学術・研究の発展に深く関わっていたのである。近代における日本学の発達と、大学教育を通じて発達した日本の近代的な学問とは、いわば「あざなう」関係にあったということもできる。その日本学と日本における学術研究の近代化が交錯するところに、近代日本を理解する鍵があるかもしれない。両者の関係がもしかすると日本の近代化を解釈するヒントを提供してくれるかもしれない。

海外の日本語コレクション

一九一〇（明治四三）年に柳田国男がアストンに贈呈した本は、最終的には図書館（ケンブリッジ大



ケンブリッジ大学図書館

含まれている可能性が高いのである。海外の図書館が所蔵する日本語書籍の蔵書を調べると、もしかしたら日本研究の歴史を発掘することができるかもしれないのである。海外の図書館が保存して来た日本語書籍の蔵書には、日本研究を理解する鍵が隠されている可能性もあり得るのである。そこで、本書では、ひとつの試みとして、海外の図書館が所蔵する日本語コレクションの蔵書から、日本研究の歴史をさぐる「旅」に出ることにしよう。もしかすると、その「旅程」から思わぬ発見があるかもしれない。海外の図書館が保存して来た日本語コレクションの蔵書を研究することにより、どのようなことが見えて来るのか、その成果は本書の中で明らかにしていきたい。

それでは、その日本研究の歴史をさぐる「旅」にふさわしい海外の図書館およびその蔵

学図書館)に入り、図書館の蔵書として保存された。図書館に収蔵されたおかげで、後代の我々もその本を手にすることができるのである。これは単なる一例に過ぎないが、図書館という機関はもとも書籍などを収集・保存し後世に伝えるという役割を持っている。多くの資料が図書館を通じて集積・保存されて来たのである。図書館は、博物館や文書館などと共に文化の保存・継承に大きく貢献する重要な機関であるといえる。もちろん、図書館にはその他にもいろいろな機能があるが、最も重要な役割は資料や情報を溜め込み集積することであろう。したがって、研究のための資料を多く所蔵するいわゆる「研究図書館」(英語でいうリサーチ・ライブラリー)の蔵書は、研究資料や情報が歴史的に累積されたものであるといひ換えることもできる。「溜め込み集積する」という役割からわかるように、図書館、特に研究図書館の蔵書にとつては、その活動の結果である「累積」が重要なのである。さらにいえば、「累積」の量は歴史の長さと同様に関係する。歴史が古いほど「累積」の量は増える。そこで、図書館の蔵書の古さが大きな意味を持つのである。すべての場合が当てはまるとは限らないが、「累積」という機能の結果、研究図書館の蔵書には当該研究の進展の歴史が含まれている場合が多い。多くの場合、研究図書館の蔵書には学問の歴史が詰まっている可能性が高いのである。

一方、海外の図書館で所蔵されている日本語コレクションは、日本研究のために構築されて来たということが出来る¹⁰⁾。そこで、海外の日本語コレクションにも、日本研究の豊かな歴史が秘められていると考えられる。外国の図書館が所蔵する日本語書籍の蔵書には、日本研究がたどった道筋が

書は、どのようにして選べばいいのであろうか。もちろん、一般的に言えば、できるだけ多くの図書館、少なくとも複数の図書館を対象にするのが理想的であるかもしれない。しかし、もしかすると、その方法は逆に焦点の拡散や調査の困難さなどの問題から、必ずしも最良の選択ではないかもしれない。また、手間暇がかかる割合には、その結果得られる成果はそれほど豊富でないかもしれない。そこで、次善の策であるかもしれないが、ひとつの典型的なまたは象徴的な図書館または蔵書に絞り込む方法も考慮に入れてみたい。もしかすると、こちらの方法の方が実現性が高く、はるかに効率がいいかもしれないのである。時間的な制約とか参照資料が限られているなどの条件から、今回は、ひとつの典型的なまたは象徴的な図書館およびその蔵書に焦点を合わせる方法で日本研究の歴史に接近することにしよう。それはひとつの図書館なり蔵書を通して日本研究の歴史をさぐる方法である。

もちろん、研究対象をひとつの図書館なり蔵書に絞る方法の場合、どの図書館とかどの蔵書を選ぶのかという点が大きな意味を持つて来る。その図書館またはその蔵書が所蔵する蔵書が、海外の日本語コレクションとしては、比較的規模が大きく、かつそれなりに長い歴史を持つことなどが重要な条件になるであろう。理想からいえば、蔵書の中にすでに日本研究の歴史を窺わせるものがあればいいのはあるが、この点は実際に調べてみないと本当のところはよくわからない場合が多い。

今回は筆者の個人的な事情も考慮に入れて、ケンブリッジ大学図書館の日本語コレクションを研究の対象にすることにした。個人的な理由としては、筆者は長年にわたりケンブリッジ大学図書館に勤務したので、その蔵書に詳しいことも利点に付け加えることができるからである。ただ、個人的な事情は別として、ケンブリッジ大学図書館の蔵書を選んだ一番の理由は、それが海外における最初の本格的な日本語書籍のコレクションであり、それなりに長い歴史に恵まれていることと、さらに比較的蔵書規模も大きく、かつ蔵書の中に古典籍などの古書や写本などが多く含まれている点である。蔵書規模だけに限定すれば、海外にはケンブリッジ大学図書館に匹敵する図書館は数多くあるかもしれないが、既述したように、その蔵書の中に古典籍などの貴重書などが多く含まれ、なおかつある程度の長い歴史がある図書館となるとやはり数が限られる。以上のような条件などを考慮すると、ケンブリッジ大学図書館の蔵書は今回のような調査の最有力の候補のひとつに数え上げることができるであろう。ケンブリッジ大学図書館およびその日本語コレクションについては後述する。本書では、ケンブリッジ大学図書館の蔵書（日本語コレクション）を手がかりにして近代日本研究の歩みをたどり、そこから近代における日本研究の実態を明らかにしてみたい。また、その蔵書が内包する歴史から近代における日本学の進展と日本における近代的な学問の発達との関係にも踏み込んでみたい。

Sample

第二章 日本研究の歴史

注

- (1) 厩尾達哉「ケンブリッジ大学図書館蔵「アストン和書目録」について(七)」(『鹿児島大学法文学部紀要 人文科学論集』六六、二〇〇七年) 四九頁。
- (2) 石井正己「『遠野物語』と『石神問答』の広告文」(『時の扉——東京学芸大学大学院伝承文学研究レポート』三、一九九九年) 三五—三七頁。
- (3) 柳田国男『石神問答』(聚精堂、一九二〇年) 二四一頁。
- (4) 柳田国男『神道と民俗学』(『定本柳田国男集』第一〇巻、筑摩書房、一九六二年) 三一七頁。
- (5) 柳田国男『石神問答』前掲書、献辞。
- (6) W・G・アストン著／補永茂助、芝野六助訳『日本神道論』(明治書院、一九二二年) 二三八頁。同前、二四三頁。
- (8) 中沢新一『精霊の王』(講談社、二〇〇三年) v—vii頁。
- (9) 田中萃一郎『柳田国男著——石神問答』(『三田学会雑誌』四—三、一九二〇年) 三六八頁。
- (10) 海外の日本語コレクションの場合、厳密に言えば日本研究以外の研究のためにも収集されて来たという事情も存在する。典型的な例としては、中国研究のために構築された日本語の書籍および雑誌のコレクションなどがそれに当たる。中国研究にとっては、日本語文献は非常に重要で、欧米では日本語文献を使用できない中国研究者は一流であると見なされない場合が多い。



図1 ケンブリッジ大学図書館の正面

付記 ケンブリッジ大学図書館のこと

図書館はもちろん中味も大事であるが、多少建物で勝負するようなところがある。建物によって提供する業務の内容が規制されるのである。書物などを入れる建造物が大きくなると、図書館のサービスも向上する場合が多い。典型的な例として、オックスフォード大学とケンブリッジ大学の「大学図書館」がある。オックスフォードの場合、大学図書館であるボードリアン図書館はもともとの場所に居続けながら発展して来た。ケンブリッジの場合、大学図書館は新しい場所に大きな建物を作り、そちらに移動した。その結果、古風なボードリアンは観光客にとっては大変魅力的な場所として人気が高いが、一方、ケンブリッジ大学図書館はケンブリッジで一番「醜い」建築物として名を馳せている(図1)。しかし、閲覧者としては、原則として開架式で本の貸出をするケンブリッジ大学図書館の方が、閉架式で貸出をしないボードリアンよりもはるかに利用しやすいのである。開架式などの利便は新しい大きな建物に移ったことにより可能になったのである。

ケンブリッジ大学図書館は二〇一六(平成二八)年に六〇〇周年記念を祝うなど古い歴史に彩られている(図2)。現在の本館は一九三四(昭和九年)に開館した。それ以前には、大学本部と卒業式などが行われるセネット・ハウス(評議会)(図3)の間に建てられた建物(旧館)(図4)に設置されていた。現在でもその建物には図書館を意味する「BIBLIOTHECA」という文字が残っており、別の図書館として利用されて来た。本書で取り上げるアストン・サトウ・シーボルト・コレクションなどの和漢古書が収蔵されたり、また皇太子時代の昭和天皇が訪問されたのは、その旧館時代のことであった。また、関東大震災により炎上し、一九二八(昭和三年)に再建された東京大学図書館と同じように、ケンブリッジ大学図書館の現在の建物が建造されるのには、ロックフェラー財団からの多大な財政援助があった。

英国の場合、日本などと比べると大学の図書館長の権限は非常に大きい。筆者がケンブリッジ大学図書館に入館したのは一九八五(昭和六



図3 セネットハウスと大学本部
左側の建物が大学本部。右側の建物が卒業式などが行われるセネット・ハウス（評議会）。その中間にあるのがケンブリッジ大学図書館の旧館。

館長がわざと自分の事務室に近接して配置したのであろう。日本語コレクションを担当する筆者の事務室もその近辺であった。ケンブリッジなどはその典型であるが、通常英国の大学の職員はオフィサーとアシスタントに二分される。オフィサーは大学卒が就くポストである。オフィサーの中には、教員などが含まれる「academic grade」と上級の事務職員、図書館員、博物館員、コンピュータ関係者などが入る「academic related grade」に分かれている。しかし、ふたつの grade（等級）は平行していて、同じ給与体系が当てはめられる。たとえば、ケンブリッジ大学では、全教員の中で教授職の数が占める割合は一割強ぐらいであるが、大学図書館の図書館長や副館長はその教授職に相当する。大部分の常勤教員（約

ほとんどは古書を含めて日本語の書籍などを扱う仕事であった。もちろん、近年にはいわゆる日本研究のための電子資料なども取り扱った。ラドクリフ氏の後も、引き続き後任の図書館長であるピーター・フォックス氏とアン・ジャーヴィス女史の下で働いた。ラドクリフ氏の前任者がエリック・キードル氏で、ケンブリッジ大学で最初の日本学者であった。キードル氏の意向であると思われるが、日本語の図書と雑誌などは図書館長の部屋がある同じ階（四階）に配架されていた。図書

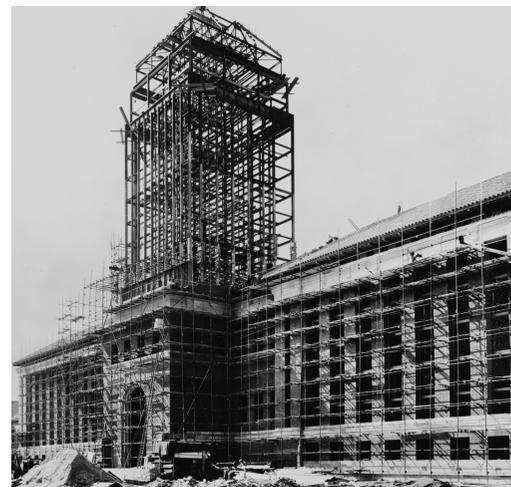


図2 建設中のケンブリッジ大学図書館新館
現在のケンブリッジ大学図書館本館の建設は、一九三一年（昭和六年）から始まり一九三四年（昭和九年）に完成した。建築家は英国の赤い電話ボックスなどをデザインしたジャイルズ・ギルバート・スコット。この写真は、本館の中央にある塔の部分などが建てられている様子を示している。

○）年四月のことで、フレッド・ラドクリフ氏が図書館長の時代であった。通常、図書館長は一〇年ぐらいいは在任するので、その在職期間はひとつの王朝のようなものである。図書館長は王様のように振る舞えるのである。筆者は日本語コレクション（日本語の図書と雑誌）担当の職員として、二〇一五年（平成二七年）九月に定年退職するまで、きつちり三〇年半勤務した。その任務の中には韓国語・朝鮮語コレクションも含まれていたが、その割合は少ない。



図5 アオイ・パヴィリオン
ケンブリッジ大学図書館本館の南側の後方部分を占める。右側に儀式用の入口がある。

金（四億五〇〇〇万円）により、アオイ・パヴィリオン（Aoi Pavilion）が建設されることになった（図5）。正式には一九九八（平成一〇年）六月に開館した。アオイ・パヴィリオンは本館の一部として建てられ、その中に東アジア閲覧室、日本語、中国語、韓国語コレクションの書庫、日本部や中国部の事務室などが含まれる（図6）。アオイ・パヴィリオンが本館に付設されたことは、東アジア閲覧室などに代表されるように、日本研究や中国研究などを取り巻く環境の改善に大きく貢献した。日本関係にとっては大きな進歩であった。以上のように過去の歴史から現在までのところ、建物自身がそれなりに図書館の業務やサービスなどに大きな影響を与えて来たことは確かであったが、今後の状況はかなり異なるのではないかと想像される。図書館はす



図4 ケンブリッジ大学図書館の旧館
法学図書館などとして使用された後、現在はゴンヴィル・アンド・キーズ・カレッジの図書館として利用されている。

六割）は講師（英語で Lecturer と呼ばれる）である。大学図書館で等級として講師に相当するポストは、アンダー・ライブラリアンとアシスタント・アンダー・ライブラリアンである。筆者はアシスタント・アンダー・ライブラリアンとして働き始め、

途中でアンダー・ライブラリアンに昇格し、その等級で定年を迎えた。以上の名称やシステムは筆者が勤務した時代のもので、すでにその時代から少しずつ変わり始めている。たとえば、ピーター・フォックス氏やアン・ジャーヴィス女史が図書館長の時代には、等級のシステムなどは同じであるが、図書館員は仕事の役割の名称を使用することが多くなり、筆者も日本部長などのタイトルを使用した。ただはつきりしていることは、いつの時代でも図書館員を含めて英国の大学職員の給料は全体に低いという点である。

図書館長がラドクリフ氏からフォックス氏に変わる時に、（株）丸井の社長青井忠雄氏からの寄

『日本の雨乞』(Japanese Rainmaking)の序文でも柳田に感謝している。柳田は一九二二(大正一一)

柳田国男は回想録『故郷七十年』の中で、ケンブリッジ大学のことを余り好かないと述べている。それは同書の「故郷七十年拾遺」の中にある「色々の外人との附合」という部分で、英国から来たふたりの若い研究者のことに言及した際の発言である。戦後のことであるが、柳田を訪問したジェフリー・ボーンズ氏とロナルド・ドーア氏に柳田が何か話をしてくれるように頼んだのに、後年英国を代表する日本研究者になった両人がそれに対して手紙などで柳田に一切連絡しなかったことに腹を立てているのである。柳田はドーア氏がロンドン大学から来たことは承知していたが、ボーンズ氏はケンブリッジ大学から派遣されて来たことと誤解していた。実際には、ボーンズ氏はケンブリッジではなく、オックスフォード大学出身であった。いづれにしてもふたりの英国人が柳田に手紙などをよこさないのは、「まさか、私がケンブリッジ大学のことを余り好かないという理由があるからでもあるまい」と彼は邪推している。

ボーンズ氏は回顧録『日本旅行』(Japanese Journeys)では柳田に数回会ったことを記し、また自著

あとがき



図6 アオイ・パヴィリオンの中にある東アジア閲覧室
手前の銅製の置物は鬼界ヶ島に取り残された俊寛を表している。現在は東アジア閲覧室の中ではなく、閲覧室の外にあたるアオイ・パヴィリオンの入口に置かれている。俊寛のブロンズ像は、ジョン・ヤング・ブキャナン(化学者、海洋学者、ケンブリッジ大学の二番目の地理学教員)からの寄贈。ブキャナンは英国の有名な海洋探検隊チャレンジャー号の一員として、一八七五(明治八)年に二ヶ月ほど日本に滞在した。俊寛の像はその時に横浜で購入したものか。

にインターネットの利用、デジタル化や電子資料の普及などを通じて、書物という物体とか、物理的な図書館の建造物などを超越する世界に突入しているのかもしれない。オープンアクセスというようなサービスでは、図書館は情報を発信する側に移動しつつある。そのような新時代の図書館は、情報化時代のハブとしてこれからもますます大きな役割を担うであろう。

図1、2、6の写真はケンブリッジ大学図書館から提供を受けた。他はすべて著者撮影。

Reproduced by kind permission of the Syndics of Cambridge University Library

年と一九二三（大正二二）年の二回英国を訪問したことがあり、日本で親しく付きあったJ・W・ロバートソン・スコットというジャーナリストと一緒にロンドン近辺などを旅行したようである。ただ、ケンブリッジを訪問したかどうかははっきりしない。柳田がケンブリッジ大学のことを余り好かないという理由には、英国の社会人類学者ジェームズ・フレイザーに対するこだわりのようなものがあるのかもしれない。『金枝篇』などの著者として有名なフレイザーは、多年ケンブリッジのトリニティ・カレッジのフェローをしていたので、柳田はフレイザーをケンブリッジ大学の教授のような地位にあつたと理解していたかもしれない。柳田にとっては、フレイザーはケンブリッジを象徴するような存在であつたかもしれない。

柳田自身フレイザーから一番大きな影響を受けていると認めているが（『柳田国男対談集』）、天皇制などの問題からフレイザーの『金枝篇』の翻訳に関わることを忌避し、翻訳の出版を妨害すると宣言していたという（岩本由輝『柳田民俗学と天皇制』、佐伯有清『柳田国男と古代史』など）。また、柳田の性格からして、自分の学問がフレイザーの著作と関係があるようなことは強調したくなかつたかもしれない。フレイザーは柳田がスイスのジュネーヴに滞在した期間を含む一九二〇年代にはヨーロッパ大陸を旅行することが多く、おそらく病気の治療とか講演などでジュネーヴを訪れたことがあつた。柳田もスイスでフレイザーに会つたと述べている（柳田国男『青年と学問』）。ただ、彼はそのことにほとんど言及していないので、もしかするとその会見は柳田にとってはあまり好ましいものではなかつたかもしれない。同じジュネーヴでチェンバレンに会おうとしたことには饒舌なのに、

同地で実際に会つたフレイザーについては口をつぐんでいるようなところがある。いずれにしてもフレイザーに対して持っていたわだかまりなどが理由で、柳田はケンブリッジ大学のことをよく思つていなかったのであらう。

柳田は『朝日新聞』でJ・W・ロバートソン・スコットの妻の妹にあたるエリザベス・キースという芸術家の著作『東側の窓』（Eastern Windows）を紹介している（『退読書歴』）。キース女史はその本の中でフレイザーに会つた時の印象を記しているが、柳田は『朝日新聞』に記載した『東側の窓』の短い紹介文で、わざわざそのことに言及している。柳田は何かフレイザーのことを強く意識しているという印象を受ける。

ケンブリッジ大学のことをよく思っていない柳田も、自分がアストンに献贈した『石神問答』がまさかケンブリッジ大学図書館に所蔵されているとは想像できなかったであらう。また、そのケンブリッジ大学の教員の中から『あずや弓』（The Calpa Bow）などの著作がある民俗学の研究者カーメン・ブラッカー氏などが出るのも皮肉な取りあわせであつたかもしれない。ある面では柳田の学問の系統はケンブリッジ大学に引き継がれていたということもできる。フレイザーの学統が日本では柳田に受け継がれ、ブラッカー氏が逆に柳田の民俗学を英国を含め海外に広めることになつた。

また、柳田は『故郷七十年』の「私の学問」の中で、次のようなことも書いている。

私のねらつていたことは、国際的に、いろいろな人にもう一度この種の問題（民俗学）を考え

させた点である。表向きは神道とか皇室論とかに外国人の研究を引きつけ、外国人で日本に興味をもつて調べたり、渡米する研究者に力を貸してやる、そういった方面に私は余力を大変使った。外国に日本のことを考えて見ようという人が出来、その人たちの著述が日本における研究を刺戟するようになったのも、嬉しい副産物であった。

柳田が意図した目的の中には、明らかに民俗学を通じて海外の日本研究を推進することも含まれていた。彼が育成し発展させようと熱望した学問の行く先にも日本研究が内在していたのである。アストンの『神道論』を読んだ柳田が『石神問答』を執筆し民俗学を発達させたように、国学同様の新しい学問（新国学）も日本研究の歴史に大きく関わることになった。

最後に本書の刊行については、勉強出版の岡田林太郎社長、編集部の豊岡愛美さんおよび岡田氏への紹介の労をとっていただいた株式会社ネットアドバンスの田中政司氏に大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

Sample